

「戦後の地域社会と伝統工芸—『うるし日記』と『結城紬』から」

日時：2018年6月20日（水）18:00-20:30（開場は17:30）

場所：東京大学本郷キャンパス工学部2号館93B教室 <http://media-journalism.org/access>

定員：80名（参加無料・申し込み不要・当日先着順）

上映作品解説



『うるし日記』

（1947年22分／理研映画）監督 東 隆史

戦争で男手がなく壊滅状態になった漆産業の復興を願い、地元実業家若杉稔が企画した映画。東京から岩手へスタッフ、俳優を呼び製作された。劇仕立てで女性の新しい生き方として漆の「掻き子」を目指す主人公の姿を、当時の状況の中で描いている。

提供 岩手県二戸市立浄法寺歴史民俗資料館



『結城紬』

（1959年17分／岩波映画）演出 時枝俊江

フジテレビの開局に合わせて放送された「年輪の秘密シリーズ」（全50話）の第5話。岩波映画の新人監督が多く起用され、撮影期間は5日程度、スタッフは4名と過酷な製作条件であったが、昭和30年代の伝統文化が息づく原風景や職人の技や心が若いスタッフの感性で記録されている。

登壇者プロフィール

・辻 徹（木漆作家・日本文化財漆協会常任理事）

1990年東京芸術大学大学院漆芸専攻修了後、漆作家として一貫したものづくりこだわる作品制作の他、茨城県大子町、常陸大宮市で漆の植林や若手に漆掻き技術の取得や漆の販売を開始している。

・湯澤規子（筑波大学 生命環境系准教授）

専門分野は女性労働の歴史的変遷および地域的差異についての研究。著書「結城紬生産地域における家族の役割とその変化—ライフヒストリーからみた暮らしの論理と紬生産—」2004年等。

主催：記録映画アーカイブ・プロジェクト（東京大学大学院情報学環丹羽美之研究室）

お問い合わせ：記録映画保存センター Tel:03-3222-4249